

「生涯の旅路」に 心打たれて…

今を遡ること17年前、私は高校1年生でした。平成3年の3月、魚津市の西部中学校を卒業し、4月の1日より、私は親元を離れ、単身山梨県は身延山高等学校へ入学しました。身延山久遠寺といえ、日蓮宗の総本山です。その総本山のお山にあつて、私は高校・大学(当時は短大で3年間でした)と6年間という長きにわたつて修行させて頂ける縁に恵まれました。身延での生活は、修行を通して、自由を束縛される代わりに、授業料や生活費の全ての面倒をみてくれるというので、私は当初、親孝行のつもりで入山しました。しかしその生活はまさに地獄でした。いま思い出すだけでも、身震いしそつに成る程です。入学当初は高校生・大学生に入学した1年生は三十人強ぐらいたつたのが、日を増すにつれ、1人辞め、2人辞め…という具合に35日目には、15人程度しか残っていませんでした。結局1年後には大学生と高校生を合わせ

て数人しか残らないという、本当に過酷な生活でした。辞めていく人達というのは、修行に入ったが、想像を絶する厳しさに付いていけなかつたというのが、紛れもない事実でした。この辞めていく人が続出するというのは、私達の年代に限つたことではなく、有史以来ずつと毎年恒例の出来事になつていくから、不思議なことではありませんでした。因みに一年間の内に夏休みというものが1週間だけあります。これは有り難いことなんですが、里に帰り、甘い汁を吸つた人の中には、もうあんな地獄のような生活に戻ることは出来ない、それがきっかけで辞めていく人間が続出した。という訳なのです。

話を戻します。身延山の本山には、学生の生活する寮が四つあるので、十人足らずのメンバーが、それぞれ4つの寮に配分されて、1つの寮に残るのは、3〜4人になります。その3〜4人で、高校2年生、大学3年生までの先輩に任せ、お給仕をしなければいけないのです。



新1年生に限つては、毎朝4時に全員起床し、先輩が起床してくる5時までには、4つの寮内の掃除と、食堂や境内の掃除を完了させるところから1日が始まります。

身延山では、5時の起床時に境内の大鐘が鳴り響きます。それと同時に全館に「ピンポンピンポン」
「おはようございます。月日、ただいま朝の大鐘がなりました」と放送が流れます。その放送までに掃除の格好から、朝勤の正装に身支度を調べて、大学3年生の寮長先輩の部屋より「先輩起こしの開始。」コンコンとノックをして「失礼いたします。先輩さん起こしに参りました」と言いながら、部屋の玄関のスリッパ等を揃えて入室します。1年生は寮の先輩を1人残らず起こして、布団も片付け、更には朝勤の正装の準備までしてあげなければならぬのです。先輩といつても色々ですから、既に起床してお経を唱えている人から、起こしても起こしても全く反応がない人もいます。しかしそんなことは言つてられません。5時20分までには、全先輩を起床させて、布団も片付けて、全員朝勤の正装にて、本堂に入室する準備を完了させなければ、我々1年生の責任になるのです。「な

んでちゃんと起こさなかつたんだ!」と…。一事が万事ですが、とにかく先輩に対して使える言葉は「ハイ」と「イエエ」の二言のみ。しかも、たとえ自分に責任が無くて、先輩が「お前がやつたんだな?」と問われれば、「ハイ(私に責任があります)」というのが常識の世界でした。いわゆる先輩が「カラスは白だ」と言われれば「ハイ白です」の世界ですね。その生活の中には沢山のルールがあつて、例えば、廊下は走れ・目を合わせて話をするな(立つて1畳前、座つて3畳前を見る)・私語は禁止・部屋では正座・テレビ新聞を見てはいけない・お菓子や間食をしてはいけない・1日5つ以上のお給仕をしる(各場所の掃除が中心)等々…そして1日の終わりには、毎晩8時半から「1日の反省会」と称して、まあ今でしたら、体罰で犯罪という事になるのでしようが、当時は気合を入れる為にと、殴られ蹴られの…地獄絵巻の時間(涙)。みっちりしこかれる時は、翌朝の4時まで絞られる日も度々ありましたから、半端じゃないのです。勿論、昼寝なんてものは存在しません。高熱があつても、「倒れるまで動け」

ってんですから、まさに身命を惜しまずです(笑)。当然ですが、先輩に蹴られて肋骨が骨折したとしても、あくまで自分の責任としなければいけません。私も殴られて、左耳の鼓膜が破れた事もありました。まさに理不尽とか、無法地帯という言葉が相応しいでしょう。1年生がほとんどの仕事を任せられ、そして先輩は高みの見物で左うちわ、何もしないのです(勿論、全先輩ではないが...)。そんな寮内の理不尽で矛盾した体制を変えようと、常日頃から考えていました。やがて大学3年生の時に寮長に任命され、ルールの見直しを計り、晴れて今までの体制をガラリと変える事に成功しました。その時のルールは今でも身延山で脈々と生きています。まあルールを変える事により良くなった面と、逆に悪くなった面が出てきたのは面白い真理ですね。完璧と言つのではないのでしょうか。でも、人間尊重、平等を説く仏教精神に基づけば、今の体制で間違いないと、私は確信しています。

ところで、遠い過去の思い出を、ここにきてわざわざ引っ張り出して

きたのには、ちゃんと理由があります。先程来より、身延山の厳しい生活体験の一部を紹介してきましたが、私がそんな辛く苦しい身延山の修行を耐えられた理由は、無事に修行を終えて、少しでも立派になった自分になり、立派な僧侶として、檀家さんや信者さんの一助になりたいという思いでした。勿論、家族の励ましや存在の大きさに、感謝しても感謝しきれないくらいの力沿えと、有り難みを常に戴く事ができました。

そんな寮の中にも、仏様のような先輩もちゃんといました。私を可愛がってくれたA先輩、私が辛く苦しい絶頂にいた時です。A先輩が私を部屋に呼んでくれました。恐る恐る部屋に入ると、黙って私の目をジーツと見つめ、「その詩を読んでみなさい」と壁を指さしました。その詩を読み終わった瞬間、色々な思いが込み上げてきて、涙を抑えることが出来なかつたのを、昨日のこのように記憶しております。実は先日、時を経てその「詩」に再び出遭うことが出来たのです。最後にその詩を皆さんに紹介して、改めて胸に焼き付け精進したいと思います。

その詩とは、仏教詩人である坂村真民さんの作、『生涯の旅路』という詩でした。

「私は私の一生の旅路において、今日というこの道を再び通ることはない。

二度と通ることはない。

二度と通らぬ今日というこの道。

どうしてうかうか通つてなろう。

笑つて通ろう、歌つて過ごそう。

二度と通らぬ今日というこの道。

嘲笑されて、そこで反省するんだよ。

叱られて、そこで賢くなるんだよ。

叩かれて、そこで強くなるんだよ。

一輪の花でさえ風雨をしのいでこそ、美しく咲いて薫るのだ。

侮辱されても笑つてつけ流せ。

蹴倒されても歯を食いしばって忍べ。

苦しいだろう悔しいだろう。

しかし君、この道は尊いといわれた人達が必ず一度は通つた道なんだ」

この詩はいつ読んでも、感銘を受けません。皆さんは如何でしたか？

合 掌 副住職 谷川寛敬

